

## 合 鴨 除 草 事 始 め

富山県厚生連健康管理課 大 浦 栄 次

## 目 次

## はじめに

## I. 完全無農薬農業を阻む雑草

- ・ドジョッコ、フナッコ戻って来い
- ・取ってもとつても湧き出る雑草
- ・雑草が人間を倒す

## II. 除草の様々な試み、そして合鴨との出会い

- ・「集合生物除草法」の着想
- ・ドジョウ、鯉、カブトエビによる除草の試み
- ・自然農法30年の置田さんとの交流
- ・鳥好きの置田さん、合鴨を飼う

## III. 合鴨除草前史

- ・合鴨の水田雑草除草効果を発見
- ・技術の普及を阻む金網張り  
—消えかかった合鴨除草法—
- ・過去、砺波平野はアヒル王国であった
- ・「合鴨が草を食べる」ことを確認していたもう一人の人

## IV. 開花した合鴨除草法

- ・合鴨除草法をスクット漁網
- ・実用的合鴨除草法、成る

- ・「網の裁断を指導して欲しい」
- ・何故「中古の漁網」であったか
- ・「霜除けシャッポ」

## V. 合鴨除草法の伝搬と普及

- ・マスコミに乗って全国に紹介された合鴨除草法
- ・第1回「合鴨除草懇談会」開催  
—1990年3月10, 11日—
- ・九州への普及

## VI. 富山で確立された合鴨除草技術と「合鴨ばんざい」

- ・合鴨飼育の効果
- ・水に合鴨を早く慣らすには
- ・「ミステリアスな頭脳に出来た  
“ミステリーサークル”
- ・日常の様々な管理技術において

## VII. 自然との共生 —合鴨除草法の未来—

- ・新技術 多群団除草法
- ・電気柵とトラバサミ
- ・明日への挑戦

資料：昭和60年（1985年）の営農日誌から合鴨を拾う

## はじめに

完全無農薬・有機農業をめざすものにとって、雑草対策は一大関門である。病虫害から稲を守ることは様々な栽培上の工夫で克服可能である。が、除草剤を用いず、雑草を押えることは至難の技である。どんなベテラン農家であっても除草だけは手取りか、せいぜい中耕機で雑草を攪拌し、押さえ付けることが最良の除草技術である。あるいは、無農薬・有機栽培と名乗りはしても、除草剤だけはしかたなく撒くという人が大半である。

この完全無農薬農業を実現するために阻んでいた最大の障壁を合鴨<sup>あいがも</sup>をもって草を取らせる、いわゆる「合鴨除草法」が昭和60年6月10日、実用的に初めて富山県福野町で試みられた。

この試みをしたのが、私の実兄、荒田清耕である。近くの有機農業30年のベテラン、置田敏雄氏の「合鴨は、草を食べてくれる。しかし、網囲いを作るのが大変で……」との示唆によるものである。

そして、この卓抜した成果が、昭和60年6

月21日付、地元紙、北日本新聞に「アイガモ除草隊の出動だ 福野町の荒田さんがアイデア」として取り上げられ、さらに6月27日の日本テレビのズームイン朝やNHKテレビ、フジテレビ系列等により全国に放送された。そして、これらの報道をきっかけに、この「合鴨除草法」は全国に燎原の火のごとく普及した。

特に、富山市に親戚を持つ福岡県の高野隆雄氏が、合鴨除草法が技術的にはほぼ確立された4年目の昭和63年から毎年富山を訪れ、その技術を習得し、九州に紹介するに至り、九州一円に爆発的に普及した。さらに、鹿児島大学の萬田正治氏は韓国、中国にも、稲作における国際的技術として合鴨除草法を紹介されている。

ところで、このように国際的な広がりを持つに至った合鴨除草法が、どのようにして産

み出されたのであろうか。

## I. 完全無農薬栽培を阻む雑草

### (1) ドジョッコ、フナッコ戻ってこい

兄、荒田清耕は富山県福野町で昭和40年代の後半から有機農業を始めた。

昭和40年代の半ば頃、村の土地区画整理が始まった。小さく曲がりくねった田は大きな整形田となり、ちょろちょろと優しい水音を奏でていた小川はうなりを上げる三方コンクリート用水に変わった。化学肥料や農薬散布は生産力を飛躍的に伸ばした。

しかし、これらの合理性と引き換えに、子供の頃、一緒に遊んだメダカやフナやドジョウ、ゲンゴロウ達も姿を消した。子供心を育んだあらゆる自然が、さよならとも言わず無言で立ち去って行った。

春の小川は さらさらいくよ……

小フナ釣し かの川……

メダカの学校は 川の中……

夕焼けこやけの 赤トンボ……

自分達の子供や孫達に、もうあの豊かな自然を味わわせる事は出来ないのだろうか。自然よ戻って来い。その一念が彼を駆り立てた。

昭和50年代に入り、自然を本当に呼び戻すためには完全無農薬・有機栽培でなければならない、と意を決した。

### (2) 取っても、とつても湧き出る雑草

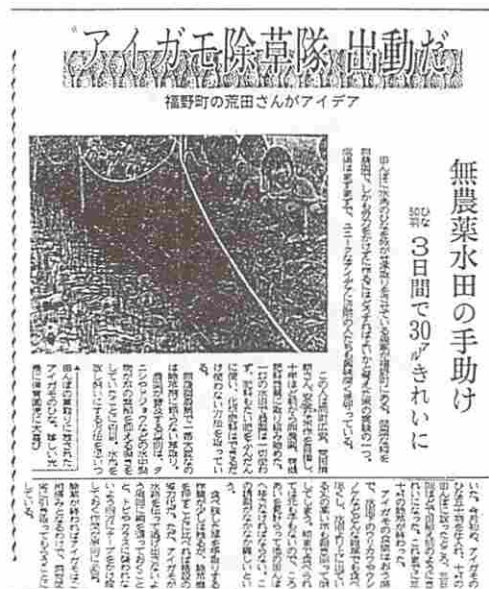
化学肥料は、堆肥や緑肥を入れることで次第に断つ事ができた。また、殺菌、防虫は多くの実践家と同様、何度かの失敗の後、ほぼ栽培上の工夫で克服してきた。

しかし、問題は除草であった。

自然を取り戻すためには完全無農薬にしな

図1 世界で初めて合鴨除草の実用化の成功を報じた北日本新聞

(北日本新聞、昭和60年6月21日)



最後の4行に、「除草が終わればアイガモは、ご用済みとなるわけで、飼育業者に引き取ってもらうことにしている」とあり、合鴨の除草と肉の利用を指摘している

ければならない。除草剤も撒くわけにはいかない。が、どんな栽培方法を工夫をしても、雑草の生命力を押しえきれない。

彼は、発電所の三交替勤務の合間を縫って、手で草を取り、草を押さえるため中耕機を何度も入れた。しかし、数度の中耕は夏のサンサンと照り輝く太陽の光を充分満喫する雑草達にとって、一服の清涼剤に過ぎない。

悲惨だったのは、60代半ばを過ぎた母であった。一日中家にいる母にとって、「自然を破壊する可能性を含む農業は撒きたくない。」との息子の理想は分かる。しかし、雑草の勢いは、息子の理想を嘲笑うかのようにとどまることを知らない。

やむなく母は兄が勤務の時、一人朝三時に起き、夜は9時頃まで、土で汚れた手が暗闇に溶け込むまで田を這いずり、雑草を採り続けた。まさに、星から星、田にへばりつく生活が続いた。

当時、私が母を訪ねる度に、「除草剤、清耕に分らんようにこっそり撒いたらあかんやろか」と問いかけてきた。私は母の目をそらし、キラキラと輝く真夏の太陽を黙って恨めしそうに見上げるのみであった。

### (3) 雑草が人間を倒す

巡り来る夏は、完全無農薬農業を目差す者にとっては、灼熱地獄の季節である。兄も同様である。頼りになるのは体力だけであるが、その体力も連日の草取りで、底をつきかけている。

ある朝、目を覚ますと、口の中に何か違和感がある。驚いて「ワーッ、ペッペッ」と吐き出すと、何と、ごはん粒である。目の前には、夕べの食卓がそのまま並んでいる。あまりにも疲労で、夕食を食べながら眠ってしまったのである。

昭和60年5月6日、無農薬農業を追及する息子を必死に支えていた母が突然倒れた。強いめまいと、嘔吐が続く。死を覚悟してか、

苦しい息づかいの中から絞りだすように、後事を託す。そし、「おら、いつ死んでも悔いはない。ありがとう」

自分の体を蝕んだ息子の無農薬農業。しかし、母はぐちを一言も言わず、看病する息子に「ありがとう」の言葉だけを繰り返した。

幸い、母はしばらくの休養で床を離れることができた。倒れた原因は過労であった。

自分の理想のために、母まで道連れにする訳にはいかない。これから夏に向かって地獄の草取りが始まる。手取り・中耕以外の除草法を考えねば、母の命まで奪うかも知れない。もう待たなしのギリギリの状況であった。

## II. 除草の様々な試み、そして合鴨との出会い

### (1) 「集合生物除草法」の着想

兄は、発電所に勤務する電気技術者である。朝から晩まで、除草の事を考え続けているうちに、夢ウツツに、電気仕掛の除草機が何台も水田を走り回る姿が浮かんでくる。「何か水の中を、集団でザーッザーッと走り回って、草を食うものはないだろうか。」「草を食べるロボット、食草ロボット……」

だが、工業的手法ではなく自然界のもので解決したい。水田を走りまわり、泳ぎまわって草を食べしてくれる動物がいないものだろうか。

集団で走りまわる動物による除草、これを恰好よく「集合生物除草法」と命名してみた。しかし、恰好いい名前をつけてはみたが、一体具体的には何がいのだろうか。

### (2) ドジョウ、鯉、カブトエビによる除草の試み

近くにドジョウの蒲焼き屋さんがある。そこにはドジョウの養殖池がある。ドジョウが無数にうごめく底を覗くと草が全く生えていない。ドジョウが土を常に攪拌するため草が



生えてこないらしい。これは、除草に役立つかもしれない。

早速、1升のドジョウを分けてもらい、3aの小さな田に放ってみる。ところが、春の水がまだ冷たいのか、ドジョウ達はみるみる土に潜ってしまい、どこに行ったのか、二度と姿をみることはなかった。

次いで鯉を試してみた。長野県佐久地方では古くから水田に鯉を放して養う、いわゆる「水田養鯉」が行われており、除草にも役立つという。約15km離れた福岡町の成田養魚園にてバケツ一杯の鯉を酸素を詰めた袋に入れてもらい、一目散に家にかけてもどり、田に放った。

しかし、水の少ない所では腹をみせ、自由に田を動かない。空にはトンビが舞い、鯉を狙っている。2週間もしないうちに、鯉の姿は一匹も見えなくなった。

小矢部市に住む美谷さんという人が、西日本に多くの分布するカブトエビが除草効果あるかも知れないと教えてくれた。美谷さんの好意に甘え、大阪、高槻市の知り合いの方にあっちこっちで採集したカブトエビ60匹を宅急便で送ってもらった。美谷さんとその友人が見守る中、何億年前の古生代の三葉虫を彷彿とさせる姿を田に放つ。

だが、これも翌日には跡形もなく消えていった。南国育ちの彼等にとっては北陸の水は冷たく、土の中で凍え死んでしまったのだろうか。

### (3) 自然農法30年の置田さんとの交流

隣の福光町に、自然農法30年の置田敏雄さんが住む。

過去に永く健康を害した時に、たまたまある人からいただいた作物を食した。これが幸いしてか、永の患いからウソのように脱出できた。それが、自然農法で作られた食物であった。このことが契機となって、自然農法に取り組み出した。

この置田さんとは、早くからお互いの農法を技術交換し、教えられることも多かった。

雑草対策で彼は、「雑草は、徹底的に取るしかない。ちょっとでも取り残すと、来年その種子が何倍ものしかえしをする。」と、30年間徹底的に取り続けた。その結果、今では、余り生えて来ない。それに、地理的にも用水の始まる場所に位置し、上流から雑草の種子が流れ込み難い所にある。

一方、兄と雑草との闘いは置田さんに比べれば、まだ始まったばかりである。それに、村の中間に位置し、上流から流れ来る雑草の種子は用水を通して際限なく供給される。

図2 有機農業の先覚者、置田敏雄さん



(置田さんは、合鴨による水田除草を昭和40年代後半)から50年代にかけ、世界で始めて試みた人である)

### (4) 鳥好きの置田さん、合鴨を飼う

ところで、置田さんは無類の鳥好きである。人間はこざかし過ぎる。鳥はウソをつかない、これが彼の口癖である。ニワトリは言うにおよばず、金鶏、銀鶏、トンビ、キジ、チャボ、コーチン等々を早くから飼っている。

その中に合鴨もいた。昭和30年代から断続的に飼っていた。

「前から、水田に合鴨を放してみている。草は食べてくれるのだが。……」

置田さんの話では、「合鴨は除草に役立ちます。」ということであったが、「合鴨が逃げていかないようにするため、金網で囲わなければならない、これが面倒で、なかなか大変

だ』という。が、集団で走り回る生物による「集合生物除草法」のイメージと合鴨がぶつかりあった。

「本当に合鴨は、除草効果がありますか」と兄。「いやあ、それはやってみないとわからん」と置田さん。その時の会話である。

このように、その当時、置田さんは合鴨除草法について兄に確信をもった言い方をしていない。それは、自分のこれまでの経験で、確かに合鴨は除草に役立つのだが、田を金網で囲むとしたら、とても、とても、との気持ちが強かったためであろう。

しかし、とにかく「集合生物除草法」の一環として、合鴨も試してみる価値はありそうだ。半信半疑ながら取り組んでみる事にした。これが、兄と合鴨との出会いであった。

### III. 合鴨除草前史

#### (1) 合鴨の水田雑草除草効果を発見

昭和40年代後半の7月も終わりのある日、置田敏雄さんは、その年の最後の辛い草取りを終え、田んぼから上がって来た。

と、見ると縦4間、横1間位の小さな池に放し飼いにしている10羽の合鴨、その合鴨達が水浴びをしながら、そこらにある草を盛んについばんでいる。「そうだ、ひよっとしたら、合鴨が除草にちょっとは役立つかもしれない。」その時、天啓に似たようなものを鋭く感じた。

次の年、早速金網を買い、田を囲い約30羽の合鴨を放った。みるみる草を食べていく。今まで苦勞していた草取りが嘘のように、ドンピシャリ除草効果がある。合鴨はまさに「草鳥(草トリ)」である。

この合鴨除草史にとって歴史的に記念すべき年は、昭和40年代の最後の年であったか、50年であったか、置田さんの記憶は定かではない。しかし、いずれにしても昭和50年代に入った頃、合鴨による水田雑草の除草が実際に行なわれていたことは紛れもない事実であ

る。

その後、50年代の前半を通じて最高70aの広さの水田まで試みたこともあった。

#### (2) 技術の普及を阻む金網張り

##### ー消えかかった合鴨除草法ー

しかし、何にしても金網は、根本的に問題があった。この金網で網囲いを作るのは苦勞のいることである。小さな鶏小屋を囲うのと訳が違う。

杭を一本一本しっかりと打ち込み、網を縛っていくが、金網を張ろうにもヨレヨレとなり、まっすぐにならない。なんとも作業性が悪く時間がかかり過ぎる。野菜づくりが忙しくて金網を張っている余裕がなく、出来ない年もあった。

また、せっかく張った金網も、1年もすると土との接触点が錆びて2年ともたない。高価な金網を毎年張り替えるのには、余りにも金がかかり過ぎる。もったいないので、前の年に土と接触していた所を、次の年は反対にして2年間使ってみたこともあったが、とても使いものにはならない。

このように余りにも手数がかかり、また金網の高価さに閉口し昭和56、57年頃からは、やめてしまった。

こうして、せっかくの除草技術は誰にも普及することなく、また置田さん自身もあきらめかけ、まさに歴史のヒダに飲み込まれ、埋もれようとしていたのである。しかし、失うには余りにも偉大なる「未完成除草曲」ではあった。

#### (3) 過去、砺波平野はアヒル王国であった

ところで、置田さんは合鴨を昭和30年代から継続的に飼っておられる。この合鴨を飼う背景はどこにあったのだろうか。もちろん、無類の鳥好きではあったが。

この合鴨とは何か。

正確にはアヒルと野鴨あひものかけあわされたも

のである。つまり、自然状態では、アヒルの飼っているところへ、自然の野鴨が空から仲間入りし、交配して出来た一代雑種が合鴨である。つまり、アヒルのいる所へ野鴨が混じって交配し、合鴨が生まれるのである。そして、合鴨もアヒルも水鳥、いわゆる水禽すいきんであり、飼育技術は基本的に同じである。

置田さんや兄が住む、富山県砺波平野は家が一軒、一軒散らばっている、いわゆる散居村で全国的に有名である。この中心に県立福野高等学校がある。前身は明治27年、1984年、今から約100年前に創立された福野農学校である。県内では最も古い農学校であり、世界的な「緑の革命」の基となる小麦の農林10号を創出した稲塚権次郎など幾多の俊英を輩出している。

この農学校では、大正12年に水禽舎すいきんしやを作り、アヒルの飼育を始めている。特に、大正13年には、当時摂政であった昭和天皇が行幸され、精根込めて飼育したアヒルが献上されている。

戦後、昭和23年、当時大規模経営として脚光を浴びてきた鶏に時代を譲り、水禽舎は取り壊され、アヒルの飼育の幕は閉じた。

しかし、この間、この学窓で学んだ多くの人達が砺波平野に散らばり、アヒルを飼い普及している。我家でも、また近所の家でも、近郷近在の多くの農家でアヒルが飼われていた。

つまり、福野農学校、福野高校はアヒル飼育の発信基地であり、砺波平野は当時アヒルの一大王国であったのである。

置田さんとこれらアヒルを直接結びつけるものは特にない。しかし、日常生活空間にアヒルが飼育されていたことが、アヒルと野鴨が交配された合鴨飼育の背景となったであろうことは十分に考えられる。

#### (4)「合鴨が草を食べる」ことを確認していたもう一人の人

兄が住む隣の村に、地元、福野町農協の

専務理事、南久三男さんが住む。

昭和37年、当時33才の南青年は鶏のプロイラーを始めた。年間2,000羽の飼育で年収500万円、当時のサラリーマンの2.5倍の売上げを誇っていた。

ところが、次第に強まる輸入圧力。鶏肉も例外ではない。そこで、海外の事情を知ろうと、大量生産国であるタイに視察に行った。そこでは、日本の商社が現地の安い労働力を使い大規模な経営を展開していた。「これでは、日本のプロイラーの先は見えている」と、強く感じた。

しかし、肉の消費そのものは拡大すると考えた南青年。その時、以前に大阪の料亭で合鴨料理を食べ、「これはうまい」と思った事を思い出した。そうだ、鶏やアヒル等大衆肉では太刀打ち出来なくても、合鴨のように高級肉なら生き残れるかもしれない。プロイラーの夢よもう一度。

四国の合鴨飼育場を役場の農林課の職員と見学に行った。驚いたことに、飼育場には草は一本も生えていない。合鴨が草をすべて食べつくしていたのだ。

昭和44年から水田の転作が始まった。この時、南青年の脳裏に、草が食いつくされた四国の合鴨飼育場が鮮烈に浮かんだ。昭和45年、転作作物として牧草を選んだ。この牧草を合鴨の餌にしようという訳である。

牧草地に放たれた200羽の合鴨達。食べるは食べる、牧草を美味しそうに食べ、合鴨は見事に飼育されていった。肉にして町会議員や近所の人達に食べてもらった。評判は上々。2年目には500羽導入。そして、いよいよ軌道に乗ると思った3年目、奥さんから「臭いからやめてくれ」とせがまれた。これは地元の人達の声かもしれないと思い、ついに断念。

いずれにしても、南さんは合鴨の貧欲なまでに草を食べる習性をしっかり確認した人であり、また実際の農業技術に応用し、直接その習性を実用的に用いた人でもある。



まさに、今日の合鴨除草法に通じるものであった。

#### IV. 開花した合鴨除草法

##### (1) 合鴨除草法をスクットした漁網

置田さんから合鴨が水田雑草を食べるとの話聞いた兄は、早速試してみることにする。

問題は合鴨を囲う網である。彼は、「網」と聞いて、すぐに漁網を思いついた。彼の知識の中には、網とは昆虫をとるタモか、漁師が使う漁網しかなかった。金網は思いもつかなかった。置田さんも「それが、いいかもしれない」と言う。

この時、置田さんは合鴨の卓抜した除草効果や金網の問題点をほとんど語っていない。もし、この時金網の問題をとことん聞かされていたとしたら、金網の概念に拘泥し、あるいは、その後の技術発展は著しく遅れた可能性もある。

早速、富山湾に面する氷見漁港において、中古の漁網25,000円也を買込む。これを、すぐ目の前の農協の共同乾燥場の広場に大きく広げ、裁断した。

ところで、漁網は伸び縮みが自由にできるように、目の一つ一つは菱形に編んであり、全体として大きな網にし、仕上げている。

図3 農協の共同乾燥所にて中古漁網を裁断する (昭和60年6月10日)



置田さんが、使用していた金網からこの漁網に変えることにより合鴨除草法は始めて、実用的技術となった。

合鴨が逃げていかない網幅は約1.2m。一定の網幅に裁断するには、巨大な漁網の一つ一つの菱形の網の目の対角線上にある頂点と頂点を順次正確に切らなければならない。もし、途中で一つでも目をずらすと、次々と位置がずれ、最後には巨大な三角形か、扇形のものが出来上がり全く使い物にならなくなる。

こうして、金網を漁網に変えることにより、竹棒等の支柱を立て簡単に網を張れるようになった。この表面的にはわずかな技術的發展により合鴨除草法が誰でも取り組める技術に一大変身をしたのである。

一度は歴史の藻屑として消え去ろうとしていた合鴨除草法。それが、この漁網によって掬い取られ、救われ、普遍的技術として昭和60年、歴史上始めて確立されたのである。

##### (2) 実用的合鴨除草法、成る

昭和60年6月5日、待望の合鴨のヒナ50羽が届いた。置田さんも50羽飼ったが、例によって金網を張る苦勞を思っかこの年も取り組んではない。

6月初旬は、合鴨達にとってはまだ寒い季節である。電気ゴツツを入れてやると、気持ちよさそうに集まってくる。母は、その当時、まだ結婚していない息子の子供の事を思いつつ、自分の孫が出来たように喜んで餌や水やりをする。

しかし、母や合鴨の表情とは逆に、次々に不安が沸き上がってくる。

稲がどの程度の時に合鴨を入れれば効果があるのか。何羽入れれば適当なのだろう。合鴨が稲を押し倒さないか。6月の水は合鴨にとって冷た過ぎはしないだろうか。

昭和60年6月10日、この日、世界初の実用的な水田雑草除草の任務をおびた50羽の合鴨達が、網に囲まれた約10aの水田に解き放たれた。

その日はちょうど村の青田巡りの日であった。巡回してきた村人や近所の子供達が見守

図4 実用的合鴨除草の世界初の試み

(昭和60年6月10日)



裁断した漁網で囲われた孵化後わずか1週間目の合鴨達が、一斉に水田雑草をついばむ。全国的アイガモ除草ブームは、この日、このわずか10aの区画の圃場から始まった。興味深かそうに見守る近所の子供達と青田巡り途中の村人

る中、合鴨達は水面を元気よく滑りながら、水面の下に生えているものを、雑草は言うに及ばず次々とつつき始めた。特に、ウリカワ、マルスゲ等、根で広がる草は土の中から上手に根を抜き取り、ソーメンをすするように飲み込んでいく。

食べている、食べている！

10a程度囲んでいた網を田一杯の30aに広げた。三日間で目だつ草はほとんどなくなった。始めは不安は一杯だったが、夏が終わるころには、合鴨除草への確信を持つことができた。

### (3) 「網の裁断を指導して欲しい」

翌、昭和61年、7月6日。前日は雨、当日は蒸し暑い日であった。兄は、上半身裸で農作業に精を出していた。そこへ、置田さんがひょっこり訪ねてこられ、「網の裁断方法を指導して欲しい。」との事。

無農薬農業の大先輩から「指導」などと言われビックリ。早速工具箱片手に置田さんの家へかけつけた。見ると漁網がダンゴになって固まっている。

早速、網をたぐり二人の人に網の端をピンと張ってもらう。一定幅を保ちながら菱形の目の頂点をカッターで一気に切る。一つで

も目を間違えると、全く使物にならないことを繰り返し話をし、十分に分かってもらい、無事裁断を終える。

こうして、置田さんもこの年から、漁網による合鴨除草を本格的に開始され、置田さんの無農薬農業の仲間にも急速に普及していったのである。

置田さん自身、「鳥は金網で囲うということしか思いつかなかった。固定概念とは恐ろしいものだ。」と、当時を振り返り述懐する。

そして、後で知ったことだが、置田さんはこの年の4～5年前にこの漁網を買い込んでおられた。しかし、置田さんの言葉では、「用意はしてみたものの、どこをどう裁断したらいいのか、手もつけられんワヤワヤのものやった」として、ついに漁網に手を染めることはなく、合鴨除草そのものも諦めかけていたのである。

漁網までたどりつきながら、実用的合鴨除草法確立に後一步と迫りながら、それを現実化するに至らなかったのである。

### (4) 何故「中古の漁網」であったか

ところで、どうして「中古の漁網」であったのだろうか。

兄が無農薬に挑戦した動機は、「自然よ戻って来い」であった。であるから、農産物の生産も極力自然を利用しながら行いたかった。また、生産資材も自然の物を利用し、使えなくなったらまた堆肥等にして自然に還元できる素材でなくてはならない。

今、兄の家に行くと、あっちこちから集めた廃材が山と積んである。また、各圃場の隅に堆肥が山と積んである。通勤途中等で、廃材を見つけたり、草を刈っている人がいるとその草を貰い受けて来るのである。

また、たとえ工業製品であっても修理して、二次利用、三次利用をする。先日も20年間使用していたボイラーが使用不能になった。たまたま、通りかかった家の前にボイラーが放



り出されている。聞くと、使用可能だが新しいのと交換したのでいらぬという。早速、貰い受け、自分で配管をやり直しボイラーを入れ換えた。トラクターも村の共同作業で5年以上使ったものを修理しながら、すでに25年近く使っている。また、わずか一万円の中古の軽トラを乗りついで、愛用しつづける。屋根の庇が雪で折れた時も、自分で修理をした。

ゴミ問題が大きな社会問題になる前から、このように、廃物も最後まで利用する、自然に還元できるギリギリまで利用する、それが彼の環境哲学である。

とにかく、利用出来るものは、最後の最後まで利用する。これが、生活の哲学となっている。置田さんから「網」と聞いて直ぐに「中古の漁網」しか思いつかなかったのは、この生活哲学、環境哲学が背景にあった。

現在、合鴨除草専用の便利な化繊網が市販されるようにまでなったが、兄は未だに中古漁網を使用している。また、網を支える支柱も何十年も昔に、家で稲干しのハサに使っていた竹を使用している。これらは、使えなくなったらすべて自然に還元できるからである。

#### (5) 霜除シャッポ

「中古の漁網」で思い出すのは、今は亡き父、憲将が考案したタバコの霜除シャッポである。

父は、大正2年生まれ。大正14年に現在のNHK放送が開始され、また、艶消電球が開発され普及したのもこの頃である。このような時代背景のもとに、父は電気に興味を抱き独学で電気技師となった。兄も父の影響で電気技術を独学で学んだ。

今でも思い出すのは、父の部屋には自分で作ったトランスのコイルを巻く道具、ありとあらゆる工具があり、兄とよくあっちこちのガラクタを使って、自分達の遊び道具や、必要なものを色々工夫して作っていた。

軍隊から復員後、電気会社に勤務。しかし、

図5 雪で折れた庇を自分で修理する兄



電気技術者の兄は「百姓とは百の姓、つまり百種類以上の仕事をする者」と言う。新築の車庫の屋根瓦を自分で葺く。また、農業機械の修理等、溶接機等を使って、全て自分で行う。

事故で大腿骨を骨折。回復はしたが、会社勤めをやめ農業に専念。昭和28、29年のことであろうか。昭和30年頃から換金作物としてタバコ栽培に取り組んだ。

我々の地方は、春になると遅霜が降りる。当時、ビニールが普及しだした頃でもあり、現在と同じようにビニールを被せて霜を防ぐ人もたまにはいた。が、高価であった。そこで、考えだしのワラで編んだ高さ約30cm、底辺の直径20cmぐらいの円錐形の「霜除シャッポ」。一見、隙間だらけに編んであるが、不思議なことに霜をバッチリ防いでくれる。この「霜除シャッポ」は当時全国に普及した。とにかく、身の回りのもので工夫することに徹していた。

兄の合鴨除草法等、様々な工夫の源泉も、父の影響があったからとも言える。

#### V. 合鴨除草法の伝搬と普及

このように有機農業の大ベテランの富山県福光町に住む置田敏雄さんにより、昭和40年代の終わり、もしくは50年代の始めに、合鴨により水田雑草を食べることが発見され、実際に除草に用いられていた。しかし、当時金網により困うという困難さから、置田さん以外に普及することなく、また置田さん自身、

50年代の終わりには合鴨による除草から遠ざかってしまっていたのである。

それが、昭和60年、兄が漁網を裁断し合鴨を囲うことにより合鴨除草法は息を吹き返し、一般に誰でもが取り組める技術として確立され、歴史の表舞台に登場したのである。

では、その後、この技術は、どのように伝搬し普及したのであろうか。

### (1) マスコミに乗って全国に紹介された合鴨除草法

昭和60年6月21日、地元紙北日本新聞の荒木記者が「アイガモ除草隊 出動だ、福野町の荒田さんがアイデア」「無農薬水田の手助けに ひな50羽3日間で30アールきれいに」と、実用的合鴨除草法が世界で始めてマスコミにより紹介された。置田さんが試みてから実に10年余りの歳月が流れていた。

続いて、TBS系の地元北日本放送局が6月27日、全国放送の「ズームイン朝」で映像により、合鴨が草を勢いよくつつき食べている姿を紹介するにおよび、全国から電話や手紙により合鴨除草法についての問合せが舞い込むようになった。

さらにこの年、7月23日付北日本新聞の「むらのカルテ 農薬を考える」で、取り上げられ、また同じ月の27日の文化欄でも取り上げられた。

翌、昭和61年、6月10日、今度はフジテレビ系列の富山放送局の「スーパータイム」で2回全国放送され、また、6月12、13日にHNK富山放送局が中部向け放送で、それぞれ合鴨達の除草の姿を映像を通して映しだし、多くの視聴者に合鴨除草法の驚異的效果を印象づけた。

### (2) 第1回「合鴨除草懇談会」開催

—1990年3月10～11日—

3年目の昭和62年、置田さんが「荒田さん、弱った、合鴨の雛が手に入らない。」合鴨除草

法が全国に急速に普及したため、合鴨の育雛<sup>いくすう</sup>場では春先に除草用雛の需要が3万羽も集中し、どうにもならない、と言っているというのである。

この一事だけでも、多くの無農薬・有機栽培を志した人達が、いかに除草に苦しんでいたかが分かる。わずか50羽から始まった合鴨除草法。それが、3年目には雛が逼迫するほど、またたくまに全国に普及したのである。

平成2年、1990年3月10、11日、富山県福光町の「ふるさと荘」において全国初の合鴨除草技術交流会である、「第1回合鴨除草懇談会」が開催された。

ここには、中部各県を中心に全国から約50人が参加した。

会場において、様々な質問が兄と置田さんに浴びせられた。合鴨の入手方法、飼い方、網の入手方法、材質、裁断の仕方、網の張り方。合鴨の適正な羽数、過剰放牧による窪み対策。水管理と除草の関係。外敵対策。合鴨の養殖、燻製、合鴨米の販路、産直の見つけ方等々。兄は、これまでの合鴨除草法を集大成して懇切丁寧に説明した。

この懇談会が事実上、合鴨除草技術が体系的に紹介された世界で最初の会合である。

### (3) 九州への普及

ところで、この世界初の合鴨除草法の技術交流会というべき「第1回合鴨除草懇談会」に九州からも2人の熱心な聴講者があった。古野隆雄夫妻である。

古野氏は、マスコミや置田さんの自然農法の仲間を通して合鴨農法を知る事になる。その彼は、富山で合鴨除草法がすでに確立していた昭和63年、合鴨除草法を学びにはるばる九州から置田さんを訪ねてきた。

その後、古野氏は合鴨除草法を九州に移植すべく、毎年数度に渡り置田さんを訪ねてきていた。

さらに深く理解しようと、先に述べた平成

2年の合鴨除草懇談会に夫婦で参加することになったのである。この会においても、古野氏は専ら聞き役であったことは、多くの人の証言するところである。

今日、合鴨除草技術を確立したのは、古野氏とするマスコミの風潮著しいが、事實は富山で確立された技術を九州に移植する作業に彼は貢献したというべきであろう。

それは、最近出版された古野氏の合鴨技術紹介書「合鴨ばんざい」（平成4年12月農文協出版）でも明らかである。つまり、この中で語られている多くの合鴨除草技術は置田さんが教授し、また、合鴨除草懇談会にて兄が参加した人達に求められるまま質問に応え紹介した技術なのである。さらに、ある部分については、古野氏は十分富山の技術が理解しえなかったのか、不完全な技術として紹介しているのである。

## VI. 富山で確立された合鴨除草法と「合鴨ばんざい」

兄は、農業に取り組みだした昭和40年代から時々の農作業を克明に大学ノートに記録している。また、作業中も工事用カメラを手放すことはなく、作業状況を撮影し、この営農日誌に張り付けている。

この貴重な記録から、幾つかの象徴的な技

図6 堀田富山県農業水産部長との歓談



（堀田富山県農業水産部長と60冊以上の営農日誌を見ながら歓談する兄。平成4年秋）

図7 観光用にもらわれて行った桜ヶ池の合鴨達  
（昭和60年8月2日）



（昭和60年NHKのインタビューに「合鴨は一鳥多石です」と明快に述べている。昭和60年合鴨の一部は観光に近くの桜ヶ池にもらわれていった。「ビヨビヨ来いよ〜」と呼ぶと覚えているのか、すぐに寄ってきた。）

術において、「合鴨ばんざい」と富山で確立された技術を対比してみよう。

### (1) 合鴨飼育の効果

「合鴨ばんざい」には、第I章「一鳥に万宝あり」、第II章「これだけある“アイガモ効果”」において、水田における合鴨飼育にどのような効果があるかを紹介している。

昭和61年、NHK富山放送局の金井ディレクターが、兄にインタビューした際、「合鴨の効果は、どうですか」との質問をしている。これに対して「合鴨は愛玩用や、桜ヶ池に引き取ってもらって観光用にもしています。また、肉にすることに躊躇することがなければ、無農薬の合鴨養殖としても利用できます。つまり、一石二鳥ではなく、一鳥多石です。」と明快に述べている。

また、合鴨技術懇談会でも、ウンカ等を取る働き、無農薬の合鴨卵の生産、合鴨の土の攪拌効果、子供達の情操教育効果等々多方面の効果について報告している。



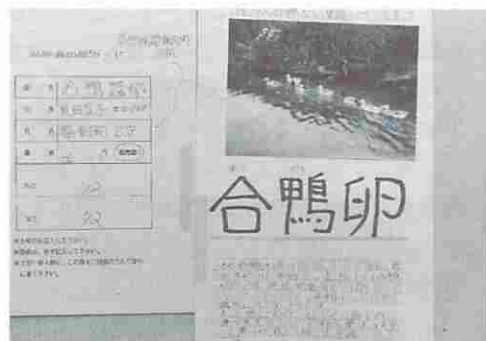
つまり、古野氏の述べている合鴨による様々な効果は、すでに昭和60年には明らかになっており、また報告されていたことなのである。ただ残念ながら古野氏は富山に何度も来ていながら理解が極めて遅かっただけのことである。

今日、古野氏は合鴨は除草効果だけでなく、合鴨の肉の生産も同時に行なうことができる、つまり「合鴨水稻同時作」なる造語を生み出している。しかし、昭和61年にすでに公共放送のNHKのテレビ放送を通して、“無農薬の合鴨肉”の生産について電波にのり多くの人達に知れ渡っていたことである。

「合鴨水稻同時作」との言葉を生み出すコピーライターとしての才能はあったかもしれないが、合鴨による稲作と、合鴨の肥育を同時に行なうということは古野氏の発案でもなんでもない。

さらに、昭和60年6月21日付の世界で始めて合鴨除草法の実用化を報じた北日本新聞の荒木記者の記事には「除草が終わればアイガモはご用済みとなる訳で、飼育業者に引き取ってもらうことにしている。」と記述されている。つまり、昭和60年当初から「無農薬合鴨肉」としての利用を当然考えていたのであ

図8 町の農業祭に自然有精卵として合鴨卵を出品した際の出品票



（大きくなった合鴨は、翌年には次々と卵を生む。鶏卵をほんの少し大きくしたような卵。割ると半野生飼いのためか黄味が高く盛り上り、濃厚な味がする。肉にするだけが能ではない。

る。

ただ、兄は、除草を手伝ってくれた共同作業業者である合鴨を食べるに忍び難く、肉利用の道に積極的に踏み込めなかったのである。

古野氏のように、合鴨は一方で「かわいく、子供達も喜ぶ」と書きながら、これまで除草を手伝ってくれた合鴨を子供達の目の前でパッサリと次々と殺して、食べる勇気がなかっただけの事である。これをいくじなしと批判するのか、否か。

## (2) 水に早く慣らすには……

次いで合鴨除草法の実際をいくつか見てみよう。

合鴨は2～3週齢以降に水に入れるのが通例であると言われる。しかし、兄は、昭和60年に始めた当初から、孵化後3日目の6月5日に合鴨を受け取り、それから、2日後の7日には、田に小区画を作って放して水慣れをさせている。

当時の営農日誌には「水を入れた皿を置くと、次々と飛び込んで、水浴びをする。数時間後には水は全くなかった。20日経たなければ、水に入れるな、であったが、試してみると少しの時間ならいいと判断。前の田に小

図9 孵化後5日目に田における水慣れをさせる母

(昭和60年6月7日)



（ヒナの水慣れを、最初に試みたのは母であった。弱い自分の息子を寒風マサツや温冷浴で強くしてきた経験を合鴨にも試みよう、まだ弱々しそくに思えるヒナを水に入れてみた。これが、今日行なわれている若齢放飼の始まりである。

区画を作って放してみる。喜んで浮かぶ。」とある。

このように昭和60年の最初の年から早くから水慣らしを始め、稲が大きくなるうちから、小さい合鴨を入れ除草効果を高めることが行なわれていたのである。

この、早くからの水慣らしは、古野氏も参加した「第1回合鴨除草懇談会」の席でも「荒田さんのところは、どうしてそんなに早く水に入れることが出来るのか」との質問を受け、兄が十分説明しているところである。

しかし、「合鴨ばんざい」によると、古野氏は兄が始めてから8年目の平成3年に、ようやく飲み込めたのか、水に早くから慣らす方法を取り入れている。がこれをあたかも自分が開発したかのように記述している。

### (3) 「ミステリアスな頭脳に出来た“ミステリーサークル”」

合鴨で除草をしていると、そのうち合鴨がある一定の場所でのみ行動し、そのうち、合鴨により稲が倒され、広いプールが出来ることがある。これを古野氏は「ミステリーサークル」と称し平成4年になって、「若齢放飼のおかげで」ようやくなくなったと書いている。

置田さんや兄はこのような事は一度も起こっていない。もちろん、兄は昭和60年に始めた最初から若齢放飼であったことは前項で述べた通りである。さらに、田面が均平でなければ水溜りができ、合鴨はそこばかりに集まり稲を踏み倒す事、また餌も同一の場所ばかりで与えると、行動範囲が集中すること、放飼数が多いと、どうしても踏み潰すことなど、やはりすでに、繰り返し、合鴨除草懇談会の席で説明したことばかりである。

要は、普通の観察眼を持っていれば充分分かることであるが、このように何年かかっても真実が見えてこないというのは、技術を自らの努力で独創的に開発することなく、常に他人の借物で間に合わせようとするためとも

考えられる。いずれにしても、「ミステリアスな頭脳に出来た“ミステリーサークル”というべきものであろう」と、置田さんや兄は苦笑する。

### (4) 日常管理の様々な技術において

合鴨の雛が来たら電気ゴツツを、また水さして水を欠かさないように等々、合鴨飼育技術は置田さんが、最初から兄に教えていたことである。これも、古野氏は自分が色々工夫したかのごとく書いているが、事実は全く逆である。

また、網の張り方は、兄が始め、また置田さんも加わり、ほぼ完璧になった技術をただなぞっているだけである。また、カラスやトンビ等の外敵からの防御方法も置田さんが、最初から、テープを張るように兄に教えていた技術そのものである。

餌は、飼育している人間を忘れさせないため、1日に1回はやらなければ飼育が困難になる、なども最初から管理技術として兄が何度も繰り返し言っている事である。

本文では、合鴨の除草技術史を直接書くことが中心目的ではないので、富山で確立された合鴨除草技術と「合鴨ばんざい」の中で述べられている技術の比較はこの程度に止めておく。しかしながら、学者と言われる人や一部マスコミが合鴨除草法を確立した富山を見聞せず、古野氏の言のみを信じて、合鴨除草法は古野氏が確立してきたと喧伝している。このような態度は真実を探究し、報道する姿勢とは到底言いがたい。

いずれにしても、「合鴨ばんざい」は富山の合鴨除草技術を紹介した図書としてはそれなりの意味はある。しかし、古野氏はあたかも自分が合鴨除草技術を開発し、確立したかのごとく随所で述べている。

置田さんは、「古野氏は、何度も何度も俺の所にきて、合鴨除草法を教わりに来ていながら、全く自分が技術開発をしたかのように述

べているのは、言語道断だ」と概嘆する。

独創的技術を必死に生み出してきた人達を無視した形のこの類の凶書は、今後、知的所有権の問題とも相まって、多に問題とされてもいいものではないかと考える。

## Ⅶ. 自然との共生を求めて、合鴨除草法の未来

### (1) 新技術、多群団除草法

兄は早くから、合鴨による除草は村ぐるみ、地域ぐるみで取り組み、網張りなどという自然界にとって不自然な作業をやめるべきと考えている。

しかし、当面は網による囲いはやむをえない。しかし、なるべく広い面積を均一に除草したいものである。そこで考えだしたのが、合鴨の多群団除草法である。

平成2年のある日、同じ町内の合鴨除草を行なっている圃場を見学した。見ると、圃場の3分の1近くが合鴨により踏み潰され大きな池が出来ている。飼主の梅木さんは、合鴨をどこかに引き取ってもらえないものかと、ほとほと困りはてていた。

ちょうど、兄は兄でこの年、始めてイタチの侵入を許しかなりの合鴨がイタチに襲われ失ったところであった。

そこで、梅木さんの合鴨を預かり、利用することになった。

ところが、家の小屋に入れると、先にいたグループと新しく入ったグループが全く融和しない。性格が合わないようなのである。圃場に入れるともっとはっきりした。一方のグループがこちらにいますと、もう一方のグループは必ず別の所にいる。一方のグループの移動に伴い、もう一方のグループも別の所をグルグル移動する。

つまり、異なる群団が入ることにより、棲み分けが起こり、隅から隅まできれいに除草することができたのである。

名付けて「2群団除草法」。

翌年には、3群を作って放ってみた。しかし、3群では、給餌など管理が複雑であり、平成4年には再び2群団方式で除草した。いずれも完璧に近い除草効果を上げた。

当然、大面積を除草する場合は、3群、4群とグループを増やす「多群団除草法」により、隅から隅まで除草でき、効果は確実となると考えられる。

### (2) 電気牧柵とトラバサミ

昭和60年から今年で9年、合鴨の飼育、合鴨を除草に入れるタイミング、網の張り方など様々な工夫を重ねてきた。

また、合鴨の最大の敵は網を破って侵入するイタチであるが、これも網の簡単な工夫で克服してきた。(現在、実用新案申請中)

ところが、古野氏が「現代農業」で紹介しているイタチ撃退法は、残酷なものである。

イタチが何かに挟まれて無残に転がっている写真が載っており、「……用水路のU字溝に虎銚とらびさみを仕掛けて、にくきイタチを捕えました。」との解説。

一瞬、目を疑った。「にくきイタチ」とはなんということであろう。さらに、電気牧柵をはりめぐらし、「外敵を退散させる一万ボルトの電気ショック」との活字が踊る。

合鴨除草法は、自然との共生をめざすため、自然を守りたいとの一心で産み出されたものである。単に、自分が安全な無農薬作物を得、経済的利益を得るためだけに始められたものではない。

人間は、自然から生まれ、自然に帰っていく。自然を守るためにも、人間を守るためにも、自然との共生をしていかなければならない。昨年、開催された地球環境サミットは人間中心では、人間そのものも守れないことを明らかにしている。

まさに、電気牧柵やトラバサミは技術進歩ではなく、技術的退歩である。

イタチは確かに、合鴨除草をするものに



としては厄介である。しかし、彼等は自然からの、地球環境からの来訪者でもある。

まして、兄はすでに、イタチから合鴨を守るため、トラバサミや、電気柵を設けなくても、網のちょっとした工夫で解決している。

### (3) 明日への挑戦

私のすぐ近くの里に最近タヌキが出没し、リンゴや梨、ウリ等の農作物が被害にあっている。地元紙には「度の過ぎた畑あらし」と載り、有害鳥獣として駆除を依頼したという。

しかし、タヌキ達が住んでいた山は人間が「度の過ぎた開発」をし、彼等の住みかを奪っている。タヌキは自分達の生活環境を破壊した人間を「駆除」することが出来ない。

ボン太もイタチも共生できる農村環境の創造、それが21世紀に人間が生き残る条件ではなかろうか。

合鴨除草法、それは確かに除草だけの目的では成功したと言えるであろう。しかし、田を網で囲うことは、農業としては明らかに不自然であり、また合鴨の水田放飼は、無理に作り出した生態系である。合鴨はオタマジャクシやその他の生き物も根こそぎ食べていく。本当にこれでいいのだろうか。

彼は、昭和40年の後半から農作業における時々の工夫、アイデアを詳細に記録し、記録写真も貼りつけている。この日誌は、すでに60冊を越えた。

合鴨除草法を早く卒業したい。そして、自然と共生しつつ、合鴨除草法を越える農法がないか、今また独創的なアイデアを実践に移そうとしている。

(なお本文は、平成4年度 毎日農業体験記録賞・地区賞を受賞したものに加筆したものである。)

## 資料：昭和60年（1985年）の営農日誌から合鴨を拾う

兄は、農業に本格的にたずさわった昭和40年代後半から営農日誌をつけている。この日誌には、時々の作業内容、反省点、アイデア等、自然環境や農業に関する事など感じたこと、意見等も含め豊富な写真とともに詳

細に記述されている。

ここでは、合鴨除草法を始めた昭和60年の営農日誌より6月から9月初旬までの合鴨や除草に関する記述を拾い、紹介する。

月、日	作業内容・観察事項
6. 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表田除草</li> <li>・福光町の竹中氏宅で動力除草機を見学する。充分実用となると思う。</li> </ul>
6. 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表田除草</li> <li>・再び、竹中氏宅で動力除草機見学</li> </ul>
6. 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・竹中氏に太嶋氏の除草機（不使用）の紹介をしてもらう。</li> <li>* 置田さんより、合鴨来たとの連絡入る。早速、今まで使っていなかった鶏小屋を修理し、受入れ準備する。</li> <li>* 網が到着。網の手直し必要。</li> </ul>
6. 5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・除草機修理、エンジンの燃料タンクの泥油の洗浄をする。</li> <li>・軽トラに除草剤をつけて撒いている人がいたので、自分が草刈りするからと止めてもらい、草刈機にて除草。</li> <li>* 合鴨を受取りに行く。1羽 300円 50羽、置田さんも50注文。高岡駅までは置田さん取りに行く。</li> <li>* 置田さんに水びん借りる。</li> <li>* 小屋に入れてやると朝日が当り、温かい所に餌えたように集まる。</li> <li>* 水やりは1日3回必要。糞、釘、草……何でもつく。野菜をみじん切りにしてやる。</li> <li>* 夜間寒がるのでコタツを入れてやる。糞は一山に重なって、コタツの直下にいる。一番上の奴はしょっちゅう水飲みに行く。水飲み器に足をつつ込むので直ぐ汚れる。</li> <li>* 餌は、盆に入れてやる。</li> </ul>
6. 6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手押し除草機を入れる。</li> <li>* 夜、アヒル達がどうしているかなと見に行くと、敷藁の上に固まって寝ている。どんな夢を見ているのかな。</li> </ul>
6. 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東田、中耕機を入れる。</li> <li>* 毎朝、合鴨に餌と水をやるのが仕事になった。</li> <li>* 水を入れた皿を置くと、次々に飛び込んで、水欲びする。数時間後には水は全くなかった。</li> <li>* 20日経たなければ、水に入れるな、であったが、試してみると少しの時間ならよいと判断。前の田に小区を作って放してみる。喜んで浮かぶ。だけど、人間が去ろうとするとピーピーと泣く。</li> </ul>
6. 8	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 合鴨は昼寝している。水には余り入りたがらない。</li> <li>* 置田さんに合鴨代金300円×50羽+送料2,600円払う。</li> </ul>
6. 10	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 網を共乾広場に持って行って広げ、裁断する。色んな方法でやってみるが、網を地面に置き、作業位置はそれより上方にするのが良。</li> </ul>

図10 ヒナをコタツで保温する



（ヒナを電気コタツで、保温するというのは、昭和60年に、置田さんから教えてもらったことである）

- \*長田に小区画を作って合鴨を作って出してやる。喜んで飛び込んでいく。少し寒くなると上がって毛づくろいをする。少し濡れる。常に水は濁り、草はたちまち見えなくなる。稲も少し倒していった。近所の人達も見に来る。子供達も来ている。いい教材だ。
- \*村の青田巡り。掃りの村人は合鴨の見学。公民館では合鴨の話でもちきり。
- 6. 11 \*合鴨用の網垣つくり。網の上端は鉤に引っ掛けより、そのまま縛る方が便。
- \*下端の縄は水中では有効だが、水没しない時は無効。網の下に合鴨が首をつっこんで脱走することが3度あった。が、遠方には行かず、かえって、強い、高い声で仲間を求める。捕らえて、群に入れてやると一目散に皆の所へ行く。
- \*トンビから合鴨を守るため、アルミテープ150円×3=270m買う。
- \*小さい区画から放してやる。喜んで一斉に飛び出す。一群となってバシャバシャ水音をさせながら、ぐるぐる回る。一日中、土や草をつついて休むことはない。たまに水から上がって日なたぼっこしている。
- \*西側の畦は半分ほどほじられている。稲の間にも首を突っ込む。
- \*網代25,000円支払う。北陸銀行水見支店
- 6. 12 ・北田、埴（手押し除草機）を押す。
- ・東田、稗とり
- \*合鴨、朝起きてみるとまだどこも開放していないのにすでに、全て田にいる。網から脱走しても決して遠くへ行かない。一日中休むことがなく、濁り水はやまない。エサは、イルゴに転換。
- 6. 13 ・西田、埴押し。
- ・母と大井さんの奥さんと北田、西田、東田の稗取り。
- \*鴨用の網つくり（巾は100目とする、13日に30m×3枚作る）これを、今合鴨を入れている田の区画を西の方に広げる。合鴨達、一斉に西の方に移動する。オタマジャクシを狙って、水中を潜る、そのままの恰好で動く。勤務中にも網作り。5枚作る。
- \*何かに驚くと一斉に集団に固まって逃げる。横一列になって西の方に行く。
- 6. 15 ・前田、埴押し。
- \*合鴨は午後から餌をやらないと腹を空かし、夕方の小屋入れの戸は、餌やりのため呼ぶと、皆集まる。餌をやり過ぎると小屋に入らない。また、草を取らずに日中は寝ている。合鴨同志、互に離ればなれになると、ピーと呼びあう。
- \*水面下の草、ウリカワ、ウシノケは完璧に取る。2日で1反/50羽。
- 6. 16 \*合鴨の小屋の清掃。毎日の糞は相当ある。蠅が出てきた。水やりも室内でするからどうしてもそうなる。
- \*朝食中、話声があるので田に見に行くと、女の人、四人と赤ちゃんが合鴨観光に来ている。女性が来るなど久しぶりである。お菓子などやってくれて嬉しい。
- 長所……食費が助かる、村の人との交流、鴨がかわいがる
- 短所……飼う主を見分けなくなるのでは、添加物の入った餌？
- \*朝、小屋の出口を開けてやると一斉に水に向かって小走りに突進。中にはつまずくものもいる。よっぽど水が好きなのだ。逆に陸地はそんな長距離は歩きたがらない。
- \*腹一杯になると日向に固まって、昼寝ならぬ、朝寝だ。
- 6. 17 \*前の田、東田に網張りをする。
- 6. 18 \*アヒルは、冬でも水面外気中にある。屋根の必要なし、置田氏の所で聞く。移動はめったに必要ない。
- ・母と一緒に除草目的の鯉を買に行く。7尾=1kg=1,500円。手溝を作って水深をつけてやる。

図11 合鴨観光に来た見しらぬ人達



（昭和60年に始めた年から見しらぬ人が合鴨観光に来た。この時、すでに合鴨が飼主を忘れないように、毎日餌をやらなければならないとしている。）



6. 21 \* 5:10~6:00 合鴨はもう泳いでいる。きのうの夜10時、せっかく作ってやった小屋には入らず、どこか水中にいるらしい。それでも餌付のため、手でイルゴ400cc程やる。  
・裏田、埒押ししてガス抜き中耕する。
6. 25 \* 今にも降りそうな朝霧の中、朝の餌をやるといそいそと駆けてくる。田の全面にちらばっているのが最初はザーという音と稲の中であちこちピヨピヨと言いながらである。  
\* 来たものから順番に列になって来る。藁は農協の共同乾燥所の一角にある。隠れ住むには丁度よさそうだが、夜寝る時は必ず田面、つまり水上に一群となり固まって警戒している。  
\* 日中畦が上がってひなたぼっこ。こうやって体を乾かすのも仕事である。
6. 27 \* 合鴨10羽、前の小田3aに放す。喜んで動き回る。稲が軟弱なのつ心配だ。昨日、表田の網をはずしてここへ移す。今までの例から考えて嚴重に網下を石で10cm間隔に押さえる。10:00~11:00
6. 28 \* 合鴨引受2羽 大門町・福寿荘
6. 29 ・南田草取、草拾い程度で終わる 7:00~8:40
7. 1 \* 網づくり 10:00~12:30 13:30~14:00 前回と同じく50目の幅で裁断、十分広げて作業のやりやすいうにする。ビニール紐は肩幅毎に粗く通す。  
\* 合鴨はすぐ人の所によって来る。前の小田のものには堆肥をひっくり返してやる。そのたびにわっと寄ってきてミミズを食べる。一羽網の外。  
\* KNBに先日の合鴨報道に対する礼状を出す。
7. 2 \* 合鴨、北田に移動すべく準備。  
\* 合鴨たちが水辺のあちこちに嘴をのぼして、掘って穴をあける。  
\* (写真説明) お山の大将ならぬ、堆肥の山の大将。「おいどっかに餌をくれるやつはいないか」下の2羽は自力更生型。いつもみみずをとってやっているのだから集まってくる。  
\* 「おい、エサをくれや、早くしろよ。堆肥の山を掘って起こせばミミズ出てくるではないか。(写真説明)  
\* 「薄情もの人間どもめ。俺たち自分でエサをとっているさ。それにしても狭い所へ閉じ込めておくな。」(畦の近くで泳いでいる合鴨の写真説明)  
\* 「めしだ、めしだぞ〜」田んぼの隅を50羽ザーという音をたててピーチクいいながら走りよってくる。可愛いもんだ。(写真説明)  
\* いよいよ北田に移す。家の躯体も垣として使う。台所のすぐ外を餌場とする。残菜はそのまま窓の外へポイ。ビニールのさしかけは雨除よけのつもりだが、合鴨は一度もその下にいなかった。堆肥山が良いらしい。
7. 5 \* 合鴨北田に移動。溝に落ちたのが上がれるように溝底から橋に斜めに板を渡しておく。
7. 11 \* 学研から2年の学習のことで取材。
7. 13 \* 雨の上がった間、畦で休む合鴨。母は後方の青いシートのかかった堆肥を掘ってミミズをとって与えている。こうやって畦を歩くだけで彼等は一列となって後をつけている。  
\* この頃から少しグアグアというようになる。  
\* 帰宅すると網にせり出すように寄ってくる合鴨達。日中は暑い日を選んで水辺か木の下にいる。
7. 19 \* 北田もいよいよ田干し。普通農家より一カ月は遅い。合鴨の遊び場確保のためである。我家の他の田と比べても2~3週遅れ。  
\* トライに水を入れてやると次々と水浴びに来る。なかよく2~3羽入っていることもあるが、こうやって一羽が占拠していることもある。そのため3羽が羨ましげに覗いている。  
\* 人間に懐いた数羽は他が全て田に遊びにいてもこうやって一羽で餌場で餌拾いをする。
7. 20 \* 合鴨2羽、大門さんびきり1,500円×2、4羽キラク(滑川レストラン・観光用に)
7. 22 \* 裏田に給水、合鴨達は水勢があり冷たい水口の流れに。
7. 25 \* プールで水泳帰りの子供達が合鴨の水浴びを見守る。人工のコンクリートプールもよいかもかもしれないが自然河川が一番。だからこそ子供たちも田んぼの中の鳥の自由な姿に憧れるのだ。網のある鳥が自由で網のない人間が不自由にも幾つもの自然河川を横目にプールまで来る。
7. 28 \* 桜ヶ池へ26羽。25羽のところ数を間違えて一羽よけいもっていったらしい。城端町役場 前田久夫氏

- \*近所の子供達が珍しがって見にくる。合鴨はすぐに集まって来る。
7. 29 \*桜ヶ池に行った、残り15羽前の小田に移す。
- \*この頃になると10日前位前から、雌雄が識別できる。
8. 2 \*桜ヶ池へ合鴨に会いに行く。「ピヨピヨ来いよ〜」と呼ぶと編隊になって湖面から進んで来た。もってきた大豆をボートの上に乗って手でやる。掃る時もなごりおしそうに陸まで上がってついてくる。(店員の話ではこんなこと始めて、とのこと)自分の子のようにかわいい。また来るから元気な。
8. 9 \*大門さん合鴨一羽逃げたのを補充する。(1,000円)
- \*母は鴨がいるため気がまぎれている。本当は孫が欲しいのだ。
- \*北田の水口の稲株2〜3株、合鴨の遊び場になるため倒されてしまった。合鴨は動く水が大好きだ。
8. 10 \*合鴨死ぬ。

合鴨一羽が弱っていた。前からヨタヨタ歩いていた奴だ。「ピヨピヨ来いよ、餌だよ」と言ってもこの一羽はまだ田の中でピーピーとないている。おかしいなと思っていながらも他の合鴨に餌をやっている、やり終わったころ、やっと稲の株の林の中から出てくるのだ。餌場にイルゴや豆をまいてやっても敏捷な他のものに取りれてしまう。いつもあきらめ顔だ。かわいそうになんとかしてやりたいものだ。それでも、片足をひきずりながら姿を表したときは、ホットする。体は、左右対称が崩れて変形してしまっている。こいつだけに餌をやるようにする。

だが、今朝は呼んでも来ない。母が探したのは水路の中。一羽ボカーンと浮かんで上がってこれないのだ。母は発泡スチロールの箱の中に入れて居間に持って来た。水と牛乳とイルゴもやってみる。だが、何も食べようとしない。再び、今度は鶏小屋に入れてみる。そして、羽に水をかけてやってみる。そうするとやっと驚いたように立ち上がって2〜3歩行って再びしゃがみこむのだ。「もう、だめかもしれない。」そう思ったが、母なんとか助けたい一心。キュウリをきざんできてやるやら、キャベツを皿に山盛にしてやるやら、水鉢で水浴びできるようにしたり、そして羽にタオルをまいてやっていた。この母がいたからこそ、子供達、僕らは生きてこれたのだ。母よありがとう。そして合鴨もお前も頑張ってはほしい。だが、何とも返事しない。なきもしない。うずくまったままだ。体も他に比べてまるで軽い。

この合鴨はもともと人なつこかった。いつもすぐに餌に飛んできた。可愛い声でピイピイ鳴いていた。人の足下にまつわりついてきて、つかかけや足をつついてきた。そしてあるとき、観客が網の中に入った。そして、不注意にもこの合鴨の足を踏みつけたのだ。ピー、かん高い声。一声で、何も無かったようだった。だが、それ以来、びっこをひくようになったのだ。動作も思うようになくなっていった。今から考えると骨折か化膿していたに違い無い。早目に獣医に見せてやればよかったのだ。

鶏小屋の藁の上にそっと置いて母と出た。親類の葬式だからだ。「ピイちゃん、ガンバって」母はそう言うのと小屋を出た。暑い日だ。36度もある。

帰ってみて、夕間の小屋に合鴨の姿を探した。のけぞるように頭を背に乗せるような恰好で相変わらずの姿でしゃがんでいた。死んだのだ。近づいてさわってみた。やはり固くなっていた。なんてことだ。一番人なつこかったのが、こうやって一番先に死んでいった。今でも、あの姿は忘れない。喜んで稲苗の間をスイスイ泳ぎまわっていたこと。「ピヨピヨ君、おいで」と言うのとザァーッと水音を出して僕を見上げてはヨチヨチ陸に上がってきたこと。ついこの間までも、びっこをひきながらも稲の間からピーピー泣きながら出てきたではないか。もう、その姿はみれないのだ。合鴨よ、お前はとうしたんだ、とうしたんだ。もう一辺あの姿を見せておくれ。元気なあの姿でひょっこり、稲の間から現れておくれ。

「ピヨピヨ君、おいで〜」と言ったとき、

図12 除草を手伝ってくれた頻死の合鴨を必死に看病する母



(ケガをし、頻死の状態になった合鴨を、自分の子供のように必死に看病する母。昭和60年8月8日)

きつとピーピーとないておくれ。

\*合鴨は弱って立てない。もうだめかもしれないと思っている自分。必死に看病する母。(写真説明)

\*50羽もらって来たとき皆、この小屋にいた。今は、まるでバラバラ。そして、瀕死のもの、一羽一羽に物語りがある。水で冷やしてやり、餌もたっぷり。(写真説明)

8. 11 \*合鴨達は食物がなくなったせいか、周辺の青草(ツユ草)等も食べている。餌場の内外では、だから土の露出具合いも違う。合鴨のためには水辺も必要。
8. 27 \*前の小田に合鴨がいるため、日中給水すると稲を倒す。中には、稲穂に飛びついて引き寄せ、食べているものも。
9. 6 \*桜ヶ池は干し上がって、かつての田んぼが見える。合鴨はどこに行ったか。岸に降りると、舟の右下に群れていた。スイカをもらっているようだが大部分みずばらしくなっている。
9. 9 \*合鴨たちは、水浴びが大好き。暑い夏だから尚さら水浴びがしたい。小さい時は、水の速さも知らず用水に入ったが、この位になると体高程度の深さの溝に入るのも躊躇している。一羽が入ると他も続いて入る。羽をばたつかせ、水しぶきを上げる。一方、いくじなしは、それなりに稲穂をのびあがって倒しから、嘴で引っ張ってから食べる。畔際の稲はまるでやられたのである。
- \*母が、大豆から虫を取ってくる。合鴨は飛びつくように喜んでくる。ミミズも好きだ。だが、柿につくイラガの幼虫、母はスガントロウと呼ぶ、は一羽がちよっと喰わえただけで、結局食べなかった。それを見ていた他の鳥も「それみたことか」という顔で知らん顔。(以上原文のまま)

これ以降も営農日誌には、農作業の記録と一緒に、合鴨の様子が記録されている。

秋になると合鴨達は、稲刈りの終わった田んぼや、近くの河原に自分達で一列の隊をなして遊びに行く。また、冬から春にかけ卵を生み、孵化した雛の事等が記述されている。

ここでは、紙数の関係で初年度の9月上旬までで止めておけるが、さらに翌年からも様々な工夫を凝らし合鴨除草法を確立してきた事をこの営農日誌で正確にたどることができる。完全無農薬米を達成する上で、重要な役割を果たした合鴨除草法の歴史を研究する上で、この営農日誌は、第一級の資料と言えよう。

本文でも紹介したが、合鴨除草法、合鴨水稲同時作を始めたと言伝古野隆夫氏の「合鴨ばんざい」(農文協出版)に書かれている多くの事が、すでにこの昭和60年の段階で行なわ

れ、工夫されていることが、上記の営農日誌の記述から分る。いずれかの機会に、その後の営農日誌の内容も紹介し、本当の意味での合鴨除草技術史を書きたいと思う。

しかし、兄は早くから「合鴨を卒業したい。」と述べている。合鴨の貧欲なるまでの食欲は、ウンカ等の害虫のみならずオタマジャクシ等、水田に住む様々な小動物を食い散らし、これが果たして環境に優しいのだろうかと思ふ。昭和60年6月13日の記述に合鴨達が「オタマジャクシを狙って、水中を潜る」と観察した時に、すでにその思いは始まる。

兄は今、合鴨によらない新たな除草技術確立に向け、独創的なアイデアを実行に移そうとしており、近い将来に紹介出来る事を期待し、この稿を終えたい。